

神嘗奉祝祭

平成二十七年十月十五日／十六日

「神嘗祭」は、神宮のお正月とも呼ばれ、年で最も重要なお祭り。例年伊勢では10月15日、16日に奉祝行事を行います。



伊勢神宮奉仕会青年部の活動の様子



初穂曳（一番車／小学生の子どもたちと皇學館大学のみなさんによる奉曳）



初穂曳（二番車／伊勢の町衆による奉曳）



初穂曳（三番車／特別神領民奉曳）



全国各地からのお祭り踊り連による「総踊り」



外宮五丈殿へ初穂とお米の奉納



15年連続の来演「阿波踊り連」

恒例となった「祭のまつり」

伊勢では、明治時代から10月15日～17日は「おまつり」として、神宮の神嘗祭をお祝いする市民のお祭りを開催してきました。現在は神嘗奉祝祭として奉祝行事が行われています。「祭のまつり」と銘打ち、日本各地から伝統あるお祭りが来勢するようになり、平成27年で15年目となりました。例年お祭り団体の一人ひとりが新米を携え伊勢に来訪され、素晴らしい踊りや唄で熱く「お伊勢さんのお正月」をお祝いしていただいています。

民俗行事の 伝承のために

はっほびき

初穂曳



そして、神嘗奉祝祭の主となる催事として、その年に収穫されたお初穂、お米を神宮へ奉納する「初穂曳」が行われます。初穂曳は神嘗祭をお祝いする伊勢にふさわしい祭り行事として、また伊勢の民俗行事である「お木曳行事」「お白石持行事」の伝統継承という意義を踏まえて、昭和47年から開催されています。

15日、外宮領陸曳では、三台の神宮の奉曳車を使用。お木曳お白石持の荷締め技術を伝えようと、それぞれの車にお木・樽・そして米俵が積まれ、たわわに実ったお初穂が飾られています。

16日の内宮領は、初穂船を曳き五十鈴川をさかのぼる「初穂曳」を実施。平成27年は宇治二軒茶屋奉献団が奉曳運行を担当しました。

伊勢神宮奉仕会青年部の活動

平成28年度で45回目を迎える初穂曳、第10回から陸曳の実務は、伊勢神宮奉仕会青年部が行うようになりました。伊勢神宮奉仕会青年部は、神宮とともにある伊勢の民として、初穂曳を中心に、一年を通し活動する団体。10代～70代と幅広い会員が参加していますが、青年層が中心となつて、木遣りや車の運行、荷締めなどを毎年継続することで技術を伝承しています。また、初穂曳の曳き手は、さまざまな町や団体による町衆（市民参加）、子どもたちと皇學館大学生、そして全国からの特別神領民の受け入れと、一般の方に参加していただくものであるため、参加者が安全に楽しく奉曳し、初穂を納められるよう、協力団体と共に企画運営しています。参加する子どもたちが田植え、稲刈りから行い、お米の大切さを感じてもらえる体験にもなっています。

5年後には50回を迎える初穂曳。お白石持行事以降に新入会した青年も増えており、次代に向かって一歩ずつ踏み出しています。

※平成28年度の実務予定については事務局にお問い合わせください



初穂曳（川曳）

Q

神嘗祭は
どんなおまつりですか？

天照大御神が瓊瓊杵尊（にぎのみこと）に稲穂を授けたはじまりからずっと、人々はお米を作り、豊作を願い、実りに感謝の祈りを捧げてきました。年間千五百にも及ぶ神宮の祭も、そのほとんどは米作りと共にめぐっていきます。お米は日本人にとって「命の糧」であり、神饌の中でも特別に大切な存在です。

そんなお米を収穫する秋、神宮では、「神嘗祭」(外宮10月15日・16日、内宮16日・17日)が行われます。その年に穫れた新穀を神様に捧げ、五穀豊穰を祈る年で最も重要な祭儀です。

神嘗祭は、闇に包まれた深夜、おごそかに斎行されます。

神様にごちそうを召し上がったいただき、国の安寧、皇室の弥栄、国民の平安を祈ります。祭器具などをすべて新しくして行われるため「神宮のお正月」とも言われます。神嘗祭の日、ご正宮の玉垣には、天皇陛下が皇居内の水田で自ら育てられた御初穂とともに、全国から奉献された稲穂の束「懸祝」(かけちから)がかけられます。

そのとき
あなたは何歳？

第63回
御遷宮までの
未来年表

平成 28 年 2016 年	平成 33 年 2021 年	平成 38 年 2026 年	平成 41 年 2029 年	平成 45 年 2033 年
現在の年齢	■第50回初穂曳 ■三重国民体育大会	■第一次お木曳 (第二次は翌年)	宇治橋渡始 奉祝行事	遷宮年 ■お白石持行事
少年(6～12才)	11～17才	16～22才	19～25才	23～29才
青年(13～45才)	18～50才	23～55才	26～58才	30～62才
壮年(46～65才)	51～70才	56～75才	59～78才	63～82才
老年(66才～)	71才～	76才～	79才～	83才～